

吉屋信子

短集

ほか短編集

吉屋 信子

信子

ほか短編集

千鳥^{ちどり}
ほか短編集^{たんぺんしゅう}

昭和四十五年九月一日第一刷

著者^{よしや} 吉屋信子^{のぶこ}

発行者 二宮信親

発行所 読売新聞社

東京都中央区銀座三の二の一 一〇四
大阪市北区野崎町七七 一五三〇
北九州市小倉区明和町一の一 一八〇二

印刷所 図書印刷株式会社
製本所 協和製本株式会社

定価 五〇〇円

目次

井戸の底	3
夏手袋	21
ほととぎす	37
ハワイのおばあちゃん	67
乳母	93
海幻譚	153
千鳥	189
あとがき	303

井戸の底

単独で登山はもとよりハイキングにも出かける勇気のあるはずの私だった。
私って娘はともさびしがりやなのだ。

(孤独)！ 考えたって身の毛がよだつ弱虫なんだから……それがはからずもたったひとりぼっちで出かけることになったのは、同行者のSもKもその前夜、キリキリ舞いの腹いたとあさましい下痢に青ざめてグンニャリだったから。

原因はこの二人の共同生活で何か奇妙な食物に当てられたらしい。

急報で私が彼女たちのアパートへ駆けつけると、狭い部屋いっぱい夜具を敷いたなかに二人ともげっそりところがついていた。

「アレが悪かったんだわね」

とSが言うと、Kは悔悟の念に堪えぬ表情で、

「よそうかと思ったけれど、つい好きだから食べちゃった、罰よ」

彼女たちの言う（アレ）とはどんな好物か私にはわかりかねた。

だが、ともかくその（アレ）のおかげで、私たち三人が半ヵ月も前から約束した小さい旅に、この二人は揃って不参加と決まった。

「ゴメンナサイ」

二人は異口同音のごあいさつだ。

「来月に延期してよ！」

とも言った。

だがその説に私は引き込まれなくなかった。もうこうなったら意地にもなって私はじぶん一人でも決行しようと奮い立った。

それには、多少この二人に私はある反撥を感じたからだ。二人はいっしょにパクツイたある食物についても私に告白せず、（アレ）など称して秘密を守るのが氣にくわなかった。

このようすでは、たとえ明朝三人で出立しても二人は、二人の間にだけ通じ合う（アレ）だの（コレ）だのの暗号でしゃべって、私は除け者にされそうな気がした。いやなこったわ！

それと言うのも、かつては高校で同級生だったが、SとKは邦文タイプライターの学校へ行ってから現在は同じ勤務先で、しかも二人は通勤上の便宜という理由でアパートの共同生活に入った。

私はほんのちょっと短期大学に通いかけたが、ひどくリアリストの母は此頃（お手伝い）の求人困難に悩んだあげく、私を娘兼お手伝いに利用しようとした結果、家庭にあって未婚の娘時代のお稽古事という体裁について陥ってしまった。

そこに、BG生活を満喫しているSやKとどこか肝心なところでズレがあるのかな……。

ともかく私はその朝、一人行くことにした。

女ひとりで行っても、べつだん危険な場所ではない。東京から近いT駅へ降りてバスが通じる山腹の温泉郷、けれどもそこはいわゆる温泉芸妓も居るお賑やかを、われわれ清純潑刺組は軽蔑して素通り、山道をぐんぐん辿って林をくぐり釣橋を渡り空のあちこちに聳える山岳の巔に残る千古の雪を眺めて溪谷に添う細い小径を合唱しながら行くと向うに広い河原——その崖つぶちにたった一軒、こっば屋根に石をとどころ乗せたヒナびた温泉宿が、今も夜のあかりはランプ……というひどく時代離れがして、凄くおもしろい。大きな炉端では竹串にさした岩魚を焼いているとかなんとか、今の季節に行くとなんとかいう、そうそうタラの芽とかもとてもおいしいなどと、SやKのお勤め先の誰かが行って、ひどく感激してしゃべりまくったのがきっかけで、S、K兩人も昂奮して「行きましようよ！」から事が始まったのに——。

その言い出し兵衛がおなかをこわしての醜態である。

——その翌朝、まったく五月晴さつきはれというありさま、もう少しでもへんてこな天候だったら諦めたが、ついに私は勇躍してほんとは三人で乗り込むはずの汽車に一人ぼっちでリュックサックを背にして——出発した。

要するに女の足でも四時間ばかりの山道のハイキングだから、リュックはしょつても、外にぎょうさんの支度ははずかしくって出来ない。

ピッケルをちよつと持ったりザイルをリュックに輪にして結びつけたりの恰好かっこうも悪くないけれど、必要のない四時間の山歩きに過ぎないから残念。

スラックスに運動靴ぐつ——万一山の温泉のランプの夜が寒かったらと、セーター。それにフード付きレンコート、ナイロンだから畳たたむとベチャンコになる。そして食糧……汽車が動き出すとすぐ口には何か入れたくなる小学生の時からの習慣を私たちはまだ脱し切れないもの。そして魔法壇ひんに紅茶。体力、装備、食糧、天候——まさに完全だった。もう何も怖こわいものなし。しかも五万分の一の地図。磁石までは不用、四時間は太陽の方角がその代りをしてくれる。あれもこれとも言うと、とうとう体温計まで持つことになっちまう。

——さて、車中でピーナッツやドロップで絶えず口を動かしていたのは、一人ぼっちで誰ともしゃべり合えないせいだと思ふ。

T 駅からのバスは大小の軒を並べた温泉旅館とおみやげ屋まで完備した温泉街に到着、そ

こでどやどやと団体客は降りてしまった。そこから息もつかずに奥の山道めがけて突進するのはどうも私ひとりらしい。

飛石連休も週末もその殺人的混雑を敬遠して、SとKも一カ年の間、公然と貰える休暇の二日を使う決心だったから、その温泉場からさらに山奥のランプの宿まで行く風流な篤志家はその日その時刻なかったらしい。

バスの車掌嬢は私がランプの温泉宿のこと聞いたたら、こともなげに、

「あら、ここからじきですよ。ここの温泉のお客さんたちは旅館の丹前に宿の下駄ばきで登って行って夕方帰るんですよ」

なあんだ、だのにリュックなんかしょい込んでちょっときまりが悪かった。

温泉街を通過、山へさしかかると、さっき汽車の窓からも遠くうす紫に見えた山藤がすばらしく、あっちにもこっちにも……そのなかにチヨロチヨロ細い滝が見えた。

もうお昼だが、もう少し山へ進んでからすばらしい眺望の岩にでも腰かけて食べようと我慢した。

やがて林に入った。松や杉とちがう樹、植物学にうといからわからないが、ともかくおひたいにしたら食べられそうな柔かい若葉の樹がぎっしり、行けども行けども樹、樹、樹——仕方がないから、その樹の根っここのところですわり込んだ。お弁当は汽車弁、大好き、腹べ

コだから、折の蓋に付いた御飯粒まで平げた。ジュースの罐を吸ってボンと投げた。腕時計はまさに二時——たいへんと林のなかから駆け出す。こんどはいちめん芒の原——それはみんな去年の秋に穂を付けて風にゆらめいていたらしい枯芒——枯れても大丈夫なもので突っ立っている。その枯芒のなかをガサガサ泳ぐように掻き分ける。五万分の一の地図にあるHという山頂の一軒きりの温泉村への道には赤鉛筆でちゃんとしるしが付けてある。だが芒の原ありとも説明は地図にはない。

枯芒がいちめん波打つのは、なんだかうす気味が悪い、どこかで山の小鳥が啼いている。ヒョウヒョウウコロンコロンと聞える……さびしいなあと思いつつながら芒の波を泳ぐように夢中で進む、早く目じるしの溪谷の小径へ出たいとだんだん焦って来た。

やっぱり一人は心細くなった……。

私の背丈より高い枯芒のなかに私は埋もれそうだ。両手でその芒をつかんで左右に分けると、枯れても強い芒にてのひらと指が痛い、不覚にも手袋なしだ。

早く芒の海から逃れたいとガサガサと芒と戦ううちに——ずしんと足許の地面が陥没したみたいに私の身体は下へ下へ——と落下した。あつ！

芒の下は崖だったのか——どすんと私の両足が烈しい勢いで谷の底に付いたと同時に身体はしびれて全身の血管が破裂して脳震盪を起したようだった。

「やったな！ 君も」

こんな声が聞えたのは、しばらくして私がまだ死なないと確信出来た時だった。

そして私が墜落したのは崖ではない暗い深い穴だともわかった。その穴の底に芒ヶ原から斜にさし込む陽の先が三角形に細ってその尖端が私の頭のあたりに僅に仄明りを示す。そのなかで、おぼろげながら、も一人の人間を私は認めた。

若い男——青年、大学の制服……それがこの穴の底のも一人の姿だった。

私より先にこの墜落者がすでに居たのだ！

「君ィ、水筒持っている？」

彼はこう聞いた。

「あるわ！ 魔法壘の紅茶」

一人には大きすぎるのに、うんと紅茶入れたから、さっきの汽車弁の時のあまりは豊富だった。彼はゴクゴク飲んだ。ビールでも飲みほすように、そしてはずかしげに、

「も少し貰ってもいい？」

「いいわ、どうぞ」

「よそう、とっておかないとあとで困るよ」

彼は克己心を奮い起して壘を返した。

「ここはきつと昔——小ぢやな城郭があつたんだ。城のなかには井戸が必要だからね。城はほろびた。そして井戸は空井戸になつたんだ、水脈が變つたんだ」

「えっ、井戸の底！」

「そうだよ君、だから井戸におつこちて水に不自由という皮肉な現象なんだ」

彼はかすかに笑った。男つてなんて余裕があるんだろ。

「あなたはいつ落ちたの？　ここに——私の前歩いていたのかしら？」

私は質問した。

「さあ、もう一年前かな……」

こんな場合、ひどすぎる戯談だ。私はくやしくなった。ひとの氣も知らないで。

「腕時計の硝子も針もふっ飛んだからね。時間の観念はゼロだ」

私も慌ててじぶんを見ると、硝子は無事だが、墜落の激動で針は止っていた。

「どうしたら助かるでしょう！」

「わからんなあ」

「助けてエ！　助けてエ！」

私は空井戸の上を見上げて絶叫した。だが力いっぱいの叫びも、空井戸の円筒型の岩壁に

みな吸いとられて、井戸のなかでだけ声が陰気にこもるだけだった。これでは、ハイカーが打ち連れて通っても炭焼きや木樵きせうの人が芒のなかを行っても耳に入るはずはない。

「伝書鳩でんずを持っていたらだ——だがぼくも君も持っていない」

「ピッケルとザイル持っていればよかったわ！ 井戸側の岩にハーケン打って……」
私は泣きたくなる。

「君もぼくも井戸の底からロッククライミングするとは思わなかったらう」

——私はしくしく泣き出した。泣くことはこの悲痛や苦悩を紛らす一種の麻薬だった。彼には慰める言葉と方法が見つからぬのか——沈黙していた。

夜になった。すると月がのぼった。ふしぎなことに、太陽より月の光の方がねっとりとして優しく井戸の底へ明りをそそぎ入れてくれた。二人の夕食は、私がリュックから取り出した板チョコ一枚を半分ずつ、そして魔法壺の紅茶をちよっぴりだけ。

「まだ何かあるのよ。でも取って置きましょうね」

「うん、ここじゃ運動不足だからいいさ」

彼は井戸底の円筒型の壁に上半身をよりかからせて横になった。

「君も眠るといいさ——空気だけは不足ないようだ。酸素も欠乏していないな」

私は夜汽車の座席で眠るような、彼の姿勢を真似た。井戸の底はあたたかだった。だがさ

らに用心してセーターを着込んでナイロンのレンコートをひろげて胸に掛けた。

狭い井戸の底は二人の身体で埋まった。彼の肩は私に触れる。私はレンコートの半分を彼の着たきり雀すずめの制服の上にかけた。

「よかったわ、私、井戸の底で一人ぼっちでなくて！」

これはまったく私の真実の告白だった。もし一人だったら、とつくに精神錯乱さくらんしていたと思う。

「君、奇蹟きせき的にここから救出されたら——記念に結婚しよう」

彼はしばらくして言った。それは断じて戯談でない真剣味を帯びていた。

記念結婚なんておかしいものがあるか、どうか知らないが……。ともかく、私はこの井戸の底で初めて求婚者を持った。此処こゝから救出されさえしたら、結婚だって離婚だって世のなかに怖ろしいものなんか一つもない気がする。

「ええ、いいわ！ 空井戸の底に落ちた運命の記念結婚、すてきね」

私は泣く代りに笑ったようだ……。

——婚約者の名は知りたい。

「あなた、お名前は？」

「名なんかどうだっていいだら、君ィ、ここに居るのは、君とぼくだけだよ。この空井戸の